

染歎キ悲テ思遣ル方无カリケレバ、住吉明神ニ御幣ヲ令奉テ、舉周ノ病ヲ祈ケルニ、其御幣ノ串ニ書付テ奉タリケル、

カハラムトオモフ命ハラシカラデサテモワカレンホドゾカナシキト、其ノ夜遂ニ愈ニケリ、
〔源平盛衰記 三十七〕熊谷父子寄城戸口并平山同所來附成田來事

直實ハ小次郎ヲ矢前ニアテジト、鎧ノ袖ヲカザシテ立隱セバ、直家ハ父ヲ孚テ、前ニ進テ箭面ニ立、武心ノ中ニモ、親子ノ情ゾ哀ナル、

〔平家物語 九〕二度のかけの事

かち原五百よき、いく田の森のさかも木をとりのけさせて、城の内へおめいてかく、略中かち原景らうどう共に、源太景時季、はいかにととひければ、あまりにふか入して、うたれさせ給ひて候やらん、はるかに見えさせ給ひ候はずと申ければ、かち原なみだをはらくとながひて、いしさのさきをかけうと思ふも、子共がため、源太うたせて、かけ時のちいきても、何にかはせんなれば、返やとて又取て返す、略中かち原を中に取こめて、我うつとらんとぞす、みける、梶原まづ我身の上をばしらすして、源太は何くに有やらんと、かけわりかけまはりたづぬる程に、あのごとく源太は、馬をもいさせ、かち立になり、かふとをもうちおとされ、略中こ、をさいごとせめた、かふ、かち原是をみて、源太はいまたうたれざりけりと、うれしう思ひ、いそぎ馬よりとむでおりに、いかに源太、かけ時こ、に有同うしぬる共、かたきにうしろを見すなとて、おやこして五人のかたき三人うつ取、二人に手おふせて、弓矢取はかくるもひくも、おりにこそよれ、いざうれ源太とて、かいぐしてぞ出たりける、梶原が二度のかけとは是なり、

〔源平盛衰記 四十四〕大臣殿舍人附女院移吉田并頼朝叙二位事

大路ヲ渡シテ後ハ、平宗盛等判官源義經ノ宿所六條堀川ヘゾ被遣ケル、物マカナヒタリケレ共、露見